

赤本についての一考察

——『菊寿草』序文「花さき爺が時代」の意味するもの——

松 原 哲 子

赤本の定義

『菊寿草』序文に「花さき爺が時代」という言葉がある。

それ鱗はこけ也。こけはすなはち不通なり。今天下に大通の道行はれ、こけはさら／＼入用なし。上は北条のおれき／＼、下は汝らごときの町人、貴賤上下ひつくるんで、皆大通へみちびかんと、こけやうろこは此方へせしめうるしと出かけたなり。しかれども汝が家はふるき家にて、源のより信の御内にまいりては、から紙表紙一重へだて、竹つな金平の用をもき、花さき爺が時代には、桃太郎鬼ヶ島の支度を請負、舌きり雀のちうを尽し、兎の手がらの数をしらず。その、ち

代々の記録をつかさどり、青本／＼ともてはやされ、かまくら一の鳥居のほとりに住居し、清信きよ倍清満など、力をあはせ、年／＼の新板世上に流布す。

これは、鱗形屋孫兵衛の江戸における出版活動の流れを振り返ったもので、「花さき爺が時代」とは「から紙表紙一重へだて」たころより後で、「青本／＼ともてはやされ」ようになる以前に設定されている。唐紙表紙とは草双紙に先行して江戸で刊行された浄瑠璃正本の類を指すと考えられるため、「花さき爺が時代」とは青本に先行し、枯れ木に花咲かせ爺・桃太郎・舌切れ雀・兎の大手柄といった昔話を題材とした鱗形屋の刊行物だと判断される。現存する資料によって判断すると、この時期に刊行された昔話を

題材とする鱗形屋根の一群は赤本を指すと判断されるため、『菊寿草』の記事は、草双紙の流れにおいて、赤本は青本に先行するもので、内容は昔話の類であるとの認識を示していると読み取れる。

赤本は黒本青本に先行するもので、内容が昔話・お伽話などの幼い子ども向けのものが中心である、という位置づけは、文学史上の認識として定着している。

例えば、『週刊朝日百科 世界の文学』八四（二〇〇一年三月、朝日新聞社）に掲載される、「文学小事典 草双紙」の項には、以下のように解説されている。

種類としては、丹色表紙の赤本、萌黄色あるいは黒色表紙の青本・黒本、同じく萌黄色表紙の黄表紙、数冊数巻をまとめて一冊とする合巻となっている。呼称は、内容の変化に対応しており、赤本はお伽話や初春の祝儀物が多く、青本・黒本は史実や歌舞伎などで大人も読者としており、黄表紙は江戸の当世的な風俗を盛り込んだ内輪ウケした内容で、合巻は伝奇性を強め、長編化したものである。

これは、『菊寿草』序文で示された草双紙の歴史的展開に、二〇〇一年当時までの草双紙の原本調査による研究成果を

反映させたものだといえる。現存する草双紙には原装を留めないために刊行年も表紙の色も明らかでないものが多く、内容も多岐に亘っている中で、赤本はお伽話や初春の祝儀物を材としている作品が主流であるのに対して黒本青本は史実や歌舞伎を材としている作品が主流であるという違いや、既存の草双紙には無かった黄表紙の新たな特性が当世の風俗を盛り込むこと、そしてそれが楽屋落ちにつながるよう構成する点にあると、それぞれの違いを明示している。右以外の辞書類や諸書の解説等にもおおよそ同趣の位置づけがなされているが、それらは皆、『菊寿草』序文に示された大田南畝の見解が拠りどころとなっているといえよう。

佐藤悟氏は「草双紙に関するいくつかの疑問」（『江戸文学』第三十五号、ペリカン社、二〇〇六年一月）で、主に赤本に関して、狂言絵尽との関係や、半太夫節、河東節系の草双紙といえる作品、吉原その他の風俗を扱った作品を具体的に挙げ、草双紙の「五丁一冊という流通形態はあらゆるジャンルを包含することが可能であったのではなからうか」（二四頁）としている。これは、赤本が昔話・お伽話・初春の祝儀物が主流であったと位置づけるような性質ものではなかった可能性を提示するものである。

そこで、本稿では『菊寿草』序文にみえる「花咲き爺が

時代」の指し示す意味を、現存する赤本全点の実態を整理することによって、検討していく。

赤本の実態

先に挙げたように、赤本には、昔話やお伽話、正月を祝うような内容が多く、読者として幼い子どもを想定している、というイメージが伴う。実際、各所蔵機関に収められる赤本の多くはそのような例が多い。一九八五年に多くの赤本を紹介した『近世子どもの絵本集 江戸篇』(鈴木重三・木村八重子編、岩波書店)では、次に示す九つのグループに分類し、赤本を紹介している。下段に各収録数を示した(併せて、『赤本黒本青本書誌 赤本以前之部』(木村八重子編、日本書誌学大系九五、二〇〇九年、青堂書店)掲載の赤本についても同様の分類を試みた結果を示す^(注1))。

『近世子どもの絵本集』↓『赤本黒本青本書誌』	
一 昔話もの	一〇点 ↓ 一七点
二 御伽草紙・説話もの	四点 ↓ 一〇点
三 祝儀もの	一〇点 ↓ 一八点
四 異類合戦	三点 ↓ 四点
五 奇想もの	三点 ↓ 三点

六 戯曲もの	七点 ↓ 三〇点
七 歌謡もの	五点 ↓ 一四点
八 遊戯本	五点 ↓ 一三点
九 教化もの	三点 ↓ 一二点
	計五〇点 ↓ 計一二一点

(他右に該当しない例一三点)

先掲の『週刊朝日百科』の分類の「お伽話や初春の祝儀物」を『近世子どもの絵本集』の一・三と対応すると考えれば二〇点で四〇パーセント、一・二・三と対応すると考えれば二四点で四八パーセントが該当する。赤本が読者として子どもを想定している、昔話・お伽話・初春の祝儀物が主流であるという見方が妥当であるという印象を受ける。

しかしながら、現在、二〇〇九年の木村八重子『赤本黒本青本書誌赤本以前之部』の刊行およびその後の新出資料の登場によって、現存する赤本は一三六種を数える^(注2)。

『赤本黒本青本書誌』によって推定されている赤本の刊行年の上限は宝永五年(一七〇七)、下限は寛延二年(一七四九)で、四〇年以上に亘っているが、その内容を『近世子どもの絵本集』の九つに分類してみると、一・三の合計が三五点で約二六パーセント、一・二・三が計四五点で約三三・三パーセントである。一九八五年に赤本の現存数が

約五〇種であった時と同様に、昔話・お伽話・初春の祝儀物がある程度の割合を占めていたことが確認できるとはいえるが、注目すべきは、『週刊朝日百科』で黒本青本と結び付けられている「歌舞伎」すなわち演劇に材を取った赤本の多さである。「六 戯曲もの」は三〇点で約二二パーセント、「七 歌謡もの」も加えれば計四四点で約三二・六パーセントと、一・二・三の合計数に迫る結果であった。つまり、現状内容を確認することができる赤本の実態は、赤本の内容の赤本と、黒本青本の内容を持つ赤本とがほぼ同数存在するということを意味する。また、『週刊朝日百科』で黄表紙の特徴とされる「江戸の当世的な風俗を盛り込んだ内輪ウケした内容」の内、江戸の町の当世的な風俗が作中に盛り込まれているという点に限定していえば全体の約二二パーセントで確認される。特に、演劇に取材した三〇点の内、二二点が刊年を推定する上で根拠とすることのできる要素が作中に盛り込まれており、草双紙が草創期既に江戸の当世風俗と強く結びつくものであることが確認される。

『赤本黒本青本書誌』に示された現存する赤本の書誌情報によれば、元表紙であると認定される例は全て丹色表紙であり、黒色や萌黄色の表紙を伴った例は確認されていない。よって、草双紙は草創期において全て赤本体裁であつ

たと想定される。また、先述のように、草創期の草双紙であるところの赤本は内容が多岐に亘っている。従来、表紙の色や成立年代の違いによって、赤本らしい内容、黒本青本らしい内容というように切り分けられている要素を、実際には、草創期において既に、草双紙はおおよそ全て持ち合わせていたと想定されるのである。

赤本・黒本併存期の赤本

赤本の多くは初めて世に出た時期が明らかでないものが多い。その主な原因は、草双紙の作中に新板目録が掲載されるようになったのが延享元年以降であることだといえよう。そのため、赤本に分類される草双紙の多くはそれぞれの内容のみを拠りどころとして刊年を推定していくため、成立時期を絞り込むことには困難を伴う。その中で、新板目録に掲載されている赤本として注目されてきたのが『塩売文太物語』である。本作は、末尾に「寛延二年」と明示された鱗形屋の新板目録が掲載されており、丹色の赤本体裁の元表紙を伴っている。また、同新板目録の中に掲載される書目のうち、鳳凰と桐の一枚題簽を伴った黒本体裁の伝本（『熊若物語』『ふぢ原のちかた』）が存在しており、赤本・黒本が共存した確固とした証拠となる例として長く

注目されてきた。^(注4)

本作は、御伽草子の『文正草子』に取材した作品で、二巻物の赤本である。赤本『はちかづきひめ』と共に、御伽草子を草双紙化した例として知られる。両作共に原拠の御伽草子の筋を二巻十丁に再構成した点は同じだが、その方法には違いが見られる。

赤本『はちかづきひめ』は原拠に登場する登場人物の外見・内面の詳しい描写、心情の変化や高まりを表した和歌の贈答など、細やかな表現の多くを削っているもの、ストーリー展開はおおむね原拠の通りに拾っている印象を受ける。『はちかづき』を知っている者もしくは知っている者が側で適宜言葉を補い読み聞かせるのであれば、十分理解し、楽しむことが可能な構成であるといえるが、何の予備知識のない者が初めて目にする場合、最低限の筋を追うことはできるが、場面転換がスムーズでない印象を受ける。一方、『塩売文太物語』の場合、御伽草子では大宮司殿の雑色であった文太が塩焼きに励んで裕福な長者「文正」になる件が赤本ではカットされ、最初から塩焼きとして登場し、塩売の文太のまま物語が展開していく。また、御伽草子では鹿島大明神に祈った結果、授かるにいたった「蓮華」「蓮御前」という名の二人の娘の誕生の件を、赤本では「小しほ」という一人娘に改変し、鹿島大明神の霊験の

件についてもカットしている。『塩売文太物語』では、原拠が『文正草子』であることの最低限の形を残しつつも、幾つかの設定・場面を切り捨てた構成になっているといえる。その一方で、『塩売文太物語』は大宮司の家に代々仕える老女「ねじかね婆」を新たに登場させ、小しほに嫁入りを追って松葉いぶしの拷問をさせたり、大宮司殿からオシドリ一羽を文太が預かるという新しい場面を挿入し、つがいであるべきオシドリが一羽であることを不憫に思った小しほが逃がしてやったことが、結果、オシドリを逃がしたことの責めを負い、柴漬にされそうになった文太夫婦を、代官所の役人と化したオシドリが助けるといふ報恩譚につなげ、再び原拠に戻って、小しほが恋に落ち、出奔した相手の商人は実は有栖の中将殿であった、という場面で物語が結ばれる。ねじかね婆の小しほへの説得・拷問からオシドリの報恩の件までは三丁裏から九丁表、計八場面に及んでおり、全体の半分以上を原拠とは関わない挿話によって構成されている。

つまり『はちかづき』は御伽草子の抄録物といえるが、『塩売文太物語』は『文正草子』をベースに、新たな物語を創出しているといえる。このオシドリの報恩譚の件については木村八重子氏により土佐浄瑠璃「塩屋文正物語」との関連によって挿話された可能性が考えられるとの指摘がなさ

れている。^(注1)江戸での上演記録によって、それを裏付けることができないため、可能性を指摘するに留まっているものの、本作が前年の寛延元年もしくはそれに近い時期の浄瑠璃上演の影響を受けて、定番の御伽草子のストーリーをベースに創作されたものであると想定することは妥当な見解といえる。『はちかづき』の初摺の新板刊行の時期については明らかでないが、『赤本黒本青本書誌』によって、おおよそ享保十年ごろの刊行との見解が示されている。^(注2)『はちかづき』と『塩売文太物語』を、それぞれの原摺のストーリーに関する知識を踏まえず、出来上がりと比較した際、『はちかづき』は場面展開がスムーズさに欠け、スペース(丁数)に対し、たくさん場面・要素が盛り込んでいるものの、それらに付随する説明が少ない印象を受けるのに対し、『塩売文太物語』は場面の展開について唐突な印象は無く、展開が円滑であり、かつストーリーの盛り上がりが設定され、全体としてのおさまりの良い構成になっているといえる。同じ御伽草子を素材にした赤本であっても、構成法が異なるのは、個々の作品の違いによるものであるかもしれない。しかし、『塩売文太物語』が草創期の草双紙ではなく、寛延二年、つまりは従来の文学史上黒本青本の時代に分類される年代に成立していることに留意すると、寛延期の草双紙の構成法に拠って成された草双紙の特徴を持つ

ていると捉えるべき事象である可能性があるものと考えらる。

『塩売文太物語』と同じく、黒本青本が刊行がされるようになって以降に刊行されたと推定される赤本を幾つかみてみたい。

『かくれ里福神よめいり』(西村重長画、鱗形屋板、三巻物)は登場人物を福神にした嫁入り物で、いかにも祝儀物として赤本らしい作品だといえる。作中に「海老蔵」の名が見え、「宗十郎を久しく見やせぬ。女護島の時のま、さ」とあることから元文から延享ごろの刊行と推定されている。^(注3)嫁入り物は早くから草双紙化されていた題材であり、場面を削除することなく、嫁入り物の流れに福神物の世界と同時代の演劇的要素を上乘せした構成となっている。

赤本の『舌切れ雀』は鱗形屋板(二巻物)と山本板(山本重春画、二巻物)の二種が確認されている。山本板は鱗形屋板をほぼそのまま再構成したようなつくりの作品である。雀のお宿で披露される踊りが、鱗形屋板では元文二年(一七三七)中村座の「一代奴一代男一代女」で瀬川菊之丞が演じた槍踊りを踏まえることから、翌元文三年に刊行されたと推定される。一方、山本板は詞章や絵組みの他に、菊之丞の踊りを作中に取り込むという趣向についても模倣し、踊りを道成寺に替えていることから、延享元年

(二七四四) 中村座の「礪末広曾我」で上演された菊之丞の「百千鳥娘道成寺」を踏まえて翌延享二年に刊行がされたものと考えられる。^(注8)

これら三点の赤本は、素材として使用された嫁入り物や昔話のストーリーが小ぶりで、原拠の要素を削除することなく二巻または三巻の草双紙に落とし込み、当世的な情報を上乗せすることによって構成した作品であるといえる。

『女はちの木』は、享保十一年(一七二六)大阪豊竹座初演の浄瑠璃「北条時頼記」五段目「雪の段」が、寛保二年(一七四一)正月江戸肥前座で「石橋山鎧襲」が初演された際に二段目と三段目の間に「女鉢の木が上演されたことの影響を受けた、翌寛保三年の刊行の可能性があるとの指摘がある赤本である。本作の冒頭から三丁表までは、「北条時頼記」の他に近松門左衛門作「最明寺入道百人上臈」下巻によるところが多く、三丁裏以降は謡曲などによって知られていた北条時頼回国伝説によって書かれたものであるとする。^(注9)

近松の浄瑠璃に取材した作品が作られた事例は黒本青本でも散見される。代表的な黒本青本作者である富川房信の作品を例に挙げると、明和七年(一七七〇)刊行の『鞍馬山出世羽団』(村木屋板、三巻物)は、近松の浄瑠璃「平家女護島」に、同じく近松の「十二段」と『義経記』に取

材した何らかの文芸を挿入するかたちで構成されている。近松の浄瑠璃の詞章を直接引用しているが、この時代に本作が刊行された背景には宝暦七年(一五七五)竹本座初演の「姫小松子日の遊」の江戸での上演などがある可能性も考えられる。^(注10)

房信は明和五年(一七六八)刊行の『福神十二段』でも近松の「十二段」の引用とみられる詞章が確認されるが、他に「国性爺合戦」・「矢の根」・「暫」を踏まえた場面が挿入されている。^(注11)筆者はかつて、房信作品に関する先行研究の成果を踏まえ、「富川房信のダイジェスト的作品の特徴は、限られた紙幅に一貫性を持った物語を収める、典拠の取捨選択の方法にある」と、富川房信の執筆姿勢についての総括を試みたことがあるが、^(注12)このような草双紙の構成法も、房信登場以前の草双紙において確認されるものであり、いつからおこなわれた方法であったのかを明らかにするには、改めて検証を要するものであるといえる。

「花さき爺が時代」の意味するところ

これまで述べてきたように、「赤本」を、黒本登場以前の草双紙を指す用語として考えると、その内容は多岐に亘っていて、『菊寿草』序文で「花さき爺が時代」と表現

したように、昔話、あるいはお伽話や初春の祝儀物が主流であると総括できるような性質のものとはいえない。また、鳥居清信・清倍・清満が草双紙の絵師として活動した期間の初期については、赤本の新版としての刊行がなされていた可能性もある。^(注1)よって、『菊寿草』序文の記事は、草双紙の歴史的展開を正しく捉えたものとはいえない。

それでは、どうして『菊寿草』序文には「花さき爺が時代」という言葉が設定されているのか、その原因について私見を述べたい。『菊寿草』を著した大田南畝は、寛延二年（一七四九）生まれの人物であるが、その著作から初期の草双紙への強い関心を持っていたことが分かる。当然のことながら、自身も草双紙の愛好家であったことも想像される。試みに鱗形屋板の草双紙の展開と対照してみると、彼の生まれた寛延二年（一七四九）ごろは、草双紙の装丁は基本的に黒本体裁であり、一部の、すなわち昔話・お伽話・初春の祝儀物については赤本体裁での刊行がなされた時期にあたる。誰もが草双紙との最初の出会いは「桃太郎」などの、幼童向けの短編であったのではないか。当然、南畝が初めて目にした草双紙はそのような幼童向けの赤本体裁のものであったと想像される。実際の鱗形屋板草双紙の装丁は、宝暦期の途中で、一部の赤本体裁を除いては初摺本は青本体裁に変化する。宝暦一〇年には南畝は一二歳、

成長した南畝が幼童向けでない、現在の文学史で指すところの黒本青本を讀書対象とするころには、草双紙の基本的な装丁が、鳳凰と桐の一枚題簽を伴った黒本であった時代は終わって、二枚題簽を伴った青本の時代になっていた。『菊寿草』序文の中に「黒本」の語が出てこないのには、そのような事情が関係しているものと推測される。

つまりは、南畝が振り返るところの「花さき爺が時代」とは、彼自身の讀書体験に基づいて用いられたものであり、草創期の草双紙全体を指したものではないといえよう。幼かった南畝が出会った桃太郎や舌切れ雀、兎の大手柄を題材とした赤本は、いかなるものであったのか。鱗形屋の新版目録の中に、赤本体裁の伝本がほとんどみられない現状から推察すると、再摺本であったのではないかと推測される。現存する赤本の摺りの状態がひどく悪い例が散見されることからいって、早い時期に板におこされ、再摺を繰り返すことよって長きに亘って多くの年少者の手に亘る、そのような草双紙との出会いを大田南畝も経験したひとりなのではないか、そのように解釈すると、『菊寿草』序文の記事は、現存する草双紙の状況と矛盾しない。

注

(1) 『近世子どもの絵本集』刊行時に同一作品と掲載され、

後に『赤本黒本青本書誌』で別本であることが示された例については、別本としてカウントした。また、『赤本黒本青本書誌』に掲載される赤本の内、九分類に該当しないものが二三点確認された。

(2) 津田真弓「赤本『絵本東海道』について―影印と翻刻」『斯道文庫論集』四四、二〇一〇年二月参照。

(3) 管見の限り、いわゆる楽屋落ちに該当するような趣向は確認されていない。

(4) 『近世子どもの絵本集 江戸篇』・『草双紙集』（新日本古典文学大系八三、一九九七年、岩波書店）木村八重子『草双紙の世界』（二〇〇九年、ぺりかん社）ほか。

(5) 注4に同じ。

(6) 当該書の「行成表紙本・赤小本・雛本・赤本 仮年表」の赤本の項目には、「今後の修正を要する私的な心覚えである。」と注記した上で、現存する赤本元禄宝永頃から宝暦明和頃まで年代順に整理している。その内、『はちかつきひめ』は享保八年と享保十一年に配置され四二番目、寛延二年刊行の『塩売文太物語』は一三番目となっている。

(7) 『江戸の絵本Ⅲ』（一九八八年、国書刊行会、加藤康子解説）所収。

(8) 『近世子どもの絵本集 江戸篇』・佐藤悟「草双紙に関するいくつかの疑問」・拙稿「実践女子大学図書館蔵『舌切雀』影印と翻刻」(実践女子大学芸芸資料研究所『年報』第二十六号、二〇〇七年三月)

(9) 佐藤悟「赤本『女はちの木』について」(『実践國文學』第五十九号、二〇〇二年三月)

(10) 拙稿「富川房信画『鞍馬出世羽団』考」(『実践國文學』第六十五号、二〇〇四年三月)

(11) 拙稿「富川房信画『福神十二段』考」(『実践國文學』第六十四号、二〇〇三年一〇月)

(12) 注11に同じ。

(13) 鱗形屋板の新板目録の記事を整理すると、鳥居清信と清満、もしくは清倍と清満の名が目録に挙がっていたのは宝暦元年から明和元年の期間である。

付記

本稿は絵入本ワークショップⅪ（於韓国・明知大学校、二〇一八年二月一六日）における口頭発表をもとにまとめたものです。発表の前後に、木村八重子先生をはじめ諸先生方に有益な御教示・御意見を賜りました。心より御礼申し上げます。

(まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師)